

京都先斗町のあやかし案内人

猫神様と迷える幼子

紫音みけ Shion Mike



アルファポリス文庫

目次

| | | |
|-----|---------------------------------|------------|
| 第一章 | 化け猫と夜桜 | ……… 5 |
| 第二章 | まめたぬき 豆狸の恩返し | ……… 56 |
| 第三章 | 濡れ女と優しい手 | ……… 109 |
| 第四章 | しあわせの座敷童子 <small>ざしきわらし</small> | ……… 165 |
| 終章 | | ……… 247 |

第一章 化け猫と夜桜

子どもが泣いていた。人通りの多い道の端にうずくまって、華奢な両腕で抱いた膝に、顔を埋めて涙をすすっていた。

年齢は十歳くらいだろうか。痩せた体に青い甚平を纏っている。淡いオレンジ色の髪はふわふわで、頭の上には三角形の耳が二つ、ぴよこんと立っている。

目の前を行き交う大人たちは、誰も足を止めようとしない。ひしめき合うように人が往来するそこは、四条通。ここ京都を代表する繁華街だ。

泣いている子どもは、おそらく人の子ではない。これだけ人の多い街中で、誰からも声をかけられないことがその証拠だ。

この子の姿はきつと、誰の目にも見えていない。たった一人、私だけを除いて。
(どうしようかなあ……)

スクールバッグに付けている白猫のキーホルダーをいじりながら、私は迷っていた。高校からの帰り道。晩ご飯の食材を買うため、駅近くのスーパーへ寄ろうとしていたところだった。

まだ日の明るいうちから、こういう存在に出くわすのは珍しい。いつもなら日没あたりから夜にかけて、たまーに見かける程度なのに。

（さすがに、このまま放っておくのは可哀想……だけど）

こんなに小さな子どもが一人で泣いているとなると、さすがに無視はできない。けれど今までの経験から、こういうモノにはあまり不用意に近づいてはいけない、という教訓もある。

過去には良かれと思って近づいて、崇^たれそうになったことも何度かあった。今日の前で泣いているこの子どもだって、私を罫^はに嵌^はめるために演技をしている可能性もある。

それに、何より。

——そういうモノが見えることは、誰にも言ってはだめよ。

脳裏^{のうり}を過ぎるのは、亡き母の言葉だ。

普通の人には見えない存在。それが見える私は、普通ではない。その事実を、周りの人々に悟られてはいけない。でないと、また好奇の目で見られてしまう。

だから今この場合も、私は見て見ぬフリをするべきなのだ。普通の人には見えないモノと関わってはいけない。触らぬ神に祟^{たた}りなしである。

わかっている。

わかっているのだけれど。

「ねえ、キミ。どうして泣いてるの?」

気づけば私は、そう声をかけてしまっていた。

どうしても無視することができなかった。だって、子どもが泣いているのだ。こんな状態の子を、一人にしておけるわけがない。

「……あれ。おねえちゃん、ボクのことが見えるの?」

それまで膝に顔を埋めていたその子は、恐る恐るといった様子で、不思議そうにこちらを見上げた。透き通るような鮎^{あゆ}色の瞳が、私をまっすぐに見つめてくる。

可愛らしい顔をしているけれど、どうやら男の子のようだ。声変わりを迎えていないボーイソプラノが耳に心地よい。

ふわふわの髪の毛の上にある耳の形からすると、猫……だろうか?

こういう存在は時々、人と動物とが融合したような姿形をしていることがある。

「うん。見えてるよ。だから、どうして泣いてるんだろうと思って」

「そっか……。人間でも、ボクたちのことが見える人もいるんだ。それじゃあ、ちよっと恥ずかしいところを見せちゃったね」

男の子はそう言くと、照れ隠しのように目元の涙を拭^{ぬぐ}う。それからすぐに立ち上がって、改めてこちらを見上げた。

「ボク、『猫神様』を捜してるんだ。この辺りにいるって聞いたんだけど、迷っちゃって」

「ねこがみさま？」

「うん。猫の神様。この大通りの近くに住んでるんだって。おねえちゃんは知らない？」

猫神様、と呼ばれる人物のことはもちろん知らない。おそらく人ではないだろうし、そういう存在がこの辺りに家を構えているなんて聞いたこともない。

いや、神様というからには、もしかしたら神社にいるのだろうか。

だとすれば、この辺りには確かに神社がいくつもある。古都と呼ばれるこの京都には、歴史ある神社仏閣が集まっているのだ。

「うーんとね。猫神様のことはわからないけど、神様がいらっしゃるところは心当たりがあるよ。よかつたら案内しようか？」

私が提案すると、男の子はばあつと顔を輝かせる。甚平の裾から覗いているふわふわの尻尾も、嬉しそうにピンと立つ。

「うん！ お願い、おねえちゃん！」

言うなり、彼はスクールバッグの反対側、私の左腕にギュツとしがみつく。

ああ、なんだか弟ができたみたいで可愛い。やっぱり勇気を出して声をかけてよ

かったな、と思う。

とにもかくにも、私はその猫神様とやらを捜して、春の京都を進んでいくのだった。



「ねえねえ。おねえちゃんはお名前なんているの？」

四条通を東へ歩きながら、私の左腕にくっついた彼は無邪気にそう尋ねてくる。

「私はね、天沢桜っていうの。キミは？」

「へえー。おねえちゃん、サクラっていうんだ。お花の桜かな？ ボクはね、蜜柑っていうんだ」

「蜜柑くん？ 可愛い名前だね」

彼のふわふわのオレンジ色の耳を見ていると、確かに蜜柑って感じがする。

なるほど、猫に蜜柑。あとはコタツがあれば完璧だな——なんてくだらないことを考えていると、不意に人の視線を感じた。

私が改めて周りに目をやると、道を行き交う人の何人かが、チラチラとこちらを見ていた。不思議そうにしていたり、どこか気味の悪そうな顔をしていたり。

（ああ、そうだった）

こういう視線は、あんまり好きじゃない。
でも仕方ないよね、とも思う。

周りの人たちはみんな、私の隣にいる蜜柑くんのが見えていないのだ。彼らからすれば、私は一人でお喋りしているように見えているはず。

こうやって変な目で見られてしまうから、母はいつも私に言っていたのだ。

——誰にも言ってはだめよ。

普通の人には見えない存在。母の目にも映らなかったモノが、私にだけは見えてしまう。

それこそ私がまだ幼かった頃は、そういう存在と人間との区別がつかなくて、人前で何度も失敗してしまった。そのたびに周りからは気味悪がられて、避けられて。見兼ねた母は口酸っぱく、私にこのことを悟られないようにと教え続けたのだ。

だから今この瞬間もきつと、私は普通の人として間違った行動をしている。もしもこの場を知り合いに見られてしまったら、また怪訝な顔をされてしまう。

けれど……と、私はわずかに視線を上げ、改めて周囲を眺める。

西日に染まっていく街を、多くの人が行き交っている。その中に、私の見知った顔は見当たらない。そもそもこの街にはまだ、友達と呼べるような人もいない。

この京都に引越してきてから、三週間程度。失うものはまだ少ない。だから今は

蜜柑くんのためにも、やはり猫神様を見つけることが先決なのだ。

そうこうしているうちに、私たちは道の突き当たりまでたどり着いた。目の前にそびえる立派な朱色の門を見上げて、私は言う。

「さあ、着いたよ。神様がいらっしゃる場所」

四条通の東の果て。石段を登った先にあるのは、『祇園さん』の呼び名で親しまれている八坂神社だ。

平日にもかかわらず多くの人が出入りしているそこには、本殿の他にもたくさんのお稲荷さんと末社とがあり、それぞれの場所で別の神様が祀られている。

それだけ多くの神様が集まる場所なら、蜜柑くんの捜している猫神様も見つかるかもしれない——と、そう思ったのだけれど。

「あれ？　ここって、神社……だよな？　猫神様は、たぶんここにはいないよ」

そんな彼の反応に、私は面食らった。

「えっ。そうなの？　神様って、神社にいるものじゃないの？」

「んつとね。猫神様は神様だけど、神社にいるわけじゃないんだ。もつとこう……お店みたいな場所にいるって聞いたよ。お料理屋さんがいつぱい並んでるところとか」
お店みたいな場所。ということは、どこかの飲食店の神棚にでも祀られているのだろうか。

「そ、そっか。じゃあ、もつと別の場所を捜さないとなね」
 蜜柑くんからの情報を基に、私たちは四条通を再び歩く。お料理屋さんがいっぱい並んでいるところ。もしかしたら四条河原町の辺りかな？　と思つて、私はそこへ向かった。

東西にまっすぐ伸びる四条通と、そこへほぼ垂直に交わる河原町通。その交差点を中心として、辺りには多くの店が軒を連ねて賑わっている。

「うーん……。お料理屋さんはいっぱいあるけど、ちょっと雰囲気が違うかも」

蜜柑くんは残念そうに言つて、ふわふわの耳をしょんぼりとさせる。

「猫神様がいるのは、もつと静かで、古いお座敷があるところなんだ」

古いお座敷。もしかしたら、どこかの老舗だろうか。この四条通付近で、そういう雰囲気のお料理屋さんがたくさんあるところ。

「もしかして、先斗町のことかな……？」

私が言うと、蜜柑くんは両耳をぴよこりと立てて食いついてくる。

「あ。そんな名前だったかも！」

どうやら当たりらしい。

先斗町というのは、この四条通の途中、鴨川のそばを曲がったところにある細長い通りのことだ。風情のある京町家が並ぶ花街で、たまに舞妓さんが歩いていることも

ある。

「よし。それじゃあ、そこに一緒に行つてみようか」

「うん！」

蜜柑くんは嬉しそうに私の左手をギュッと握ってくる。

目的の場所までは、歩いて十分とからなかった。

「わっ、すごい。この道だけ、なんだか他と雰囲気が違うね」

先斗町は、車が入れないほどの狭い通りだ。その細長い道の両脇に、和の情緒溢れる町家が建ち並ぶ様を見て、蜜柑くんは感嘆の声を上げた。

「うん、やっぱりこの辺りかも。猫神様がいるところ」

どうやらこの通りのどこかにいるらしい。もう少しで、猫神様に会える。けれど、店がたくさんありすぎて一体どこへ入ればいいのかわからない。

気軽に中へ入って確認できればいいのだけれど、なんだか高級そうなお店や、一見さんお断りっぽいところもあって、ちよつと入りづらい雰囲気がある。

さてどうしようか、と頭を悩ませていると――

「あっ！」

と、急に蜜柑くんが大きな声を上げた。

一体どうしたのかと見てみると、彼の瞳が見つめる先には、一匹の小さな生き物の

姿があった。

雪のように白い毛並みと、頭の上に立つ三角形の二つの耳。それにお尻から伸びる細長い尻尾。

道の真ん中で、ちょこんと座ってこちらを見つめ返しているのは一匹の猫だった。
(可愛い！)

その愛くるしい姿に、私は瞬時に心を奪われていた。

猫がいる。しかも私が一番好きな白猫。

思わず胸を高鳴らせる私の隣で、蜜柑くんはその猫をまっすぐに見ながら言う。

「猫神様だ！」

「えっ？」

猫神様、と彼は言った。

けれど、道の先にいるのはどう見てもただの猫だ。

白い毛並みは艶つやがあつて、足の先や尻尾の先にちょこっただけ赤い模様が入っている。鼻と耳がピンク色をしていてとても可愛い……じゃなくて。

あの白猫が、本当に例の猫神様なのだろうか。

「あ……蜜柑くん、待って！」

こちらがぼーっとしている間に、蜜柑くんの背中はどうどん遠くなって、私は慌て

て追いかける。白猫はそんな私たちをどこかへと誘うように、身軽な体を翻ひるがえして花街の奥へと駆けていく。

道の両脇に並ぶ店の提灯ちょうちんが、次々と赤い光を灯ともしていく。どうやら日没を迎えたよう

うで、空はいつのまにか夜の色を連れてきていた。白猫はやがて、道の途中で右へ曲がった。同じようにして私たちもそこを曲がろうとすると、

「わっ……」

思わず、そんな声が出た。

曲がり角の向こうに続く路地は、さらに細くて暗かった。人が一人ギリギリ通れるくらいの狭い道が、長くまっすぐ続いて、その突き当たりの左側からほんのりと灯あかりが漏れている。

なんだか、この先に秘密の隠れ家でもあるような雰囲気だった。けっして覗いてはいけない世界が、そこに広がっているかのように。

「きつとあそこだね、猫神様のところ！」

蜜柑くんは変わらず明るい声で言つて、そのまま道の先へと走り出す。

そして私はいえ、その場の雰囲気につい怖気おそづいて尻込みしていた。

この先で、猫神様が待っている。

蜜柑ちゃんと違って人間である私は、このまま足を踏み入れてもいいのだろうか——と、今さらになって不安を覚える。

「桜おねえちゃん、何してるの。早くおいでよ！」

蜜柑くんが早く早く嬉しそうに手招きする。そんな彼を見て、私はようやく前へ進む決心をする。

そうだ。私は道案内を引き受けたのだから、最後まで見届けなきゃ。

意を決して足を踏み出し、真っ暗で狭い路地を進んでいく。やがて突き当たりの手前までやってきて、左側をそっと覗いてみると、そこには何かのお店と思いき入り口があった。

閉じられた木製の格子戸こうしどから、淡い光が漏れている。足元には行燈あんどんもあって、一見すると他のお店と変わらない佇まいだ。

けれど看板のようなものは何もないし、暖簾のれんも表札も出ていない。

本当にここがそうなの？ と訝る私の目の前で、蜜柑くんは無遠慮に扉を横へスライドさせた。

「おじやましーす！」

「あっ……ちょ、ちよつと蜜柑くん！」

いきなり入ったら怒られるんじゃないかと焦る私の耳に、今度は別の声が届く。

「いらつしやい。ようこまでたどり着きましたね」

男の人の声だった。京都っぽい訛りなまの、穏やかで、どこか甘い響きのある透き通った声。

見ると、扉の奥にはまるで旅館のような広い土間があり、上がり框かまちの向こうに客を迎えるためのスリッパが揃そろえてある。

そして、さらにその奥。淡い暖色の絨毯じゅうたんが敷かれた正面には、一人の青年が立っていた。

その姿は、一目でこの世のものではないとわかる美しさだった。

雪のように真っ白な、背中まで伸びる長い髪。それを赤い紐紐で結び、身に纏うのは白を基調とした羽織袴はおりはかま。肌も抜けるように白く、やや切れ長の瞳は黄金色こがね。

見た目の年齢は二十代の前半から半ばくらいで、鼻筋の通った端正な顔なんざいをしている。

「猫神様！」

蜜柑くんは嬉しそうに言って、すぐさま彼のもとへと駆けていく。

（あれ？ さっきはあの白猫のことを猫神様って言ってたけど、こっちが本物？）

確かに見た目の神々しさでいえば、こちらが正解のような気はするけれど。

「よしよし、蜜柑さん。あなたはまだ半人前なんですから、こっちの世界に来たらあかん言うたはずでしょう」

猫神様は、自分の腰にしがみついてきた蜜柑くんの頭を優しく撫でる。

「ごめんなさい。でもボク、どうしても会いたい人がいて……」

どうやら二人は顔見知りらしい。彼らの会話についていけない私は、こういう顔を
していればいいのかわからず、所在なく視線を泳がせる。

と、そんな私の様子に気づいたのか、猫神様は今度は私の方を見てにこりと笑いかける。

「そちらのお嬢さんも、遠慮せんと中に入ってくださいね」

「えっ。あ、はい。ありがとうございます……」

思いのほか優しいげに声をかけられて、私はオロオロとしながら土間に足を踏み入れた。

「さて。蜜柑さんがわざわざごこっちの世界に来たいことは、込み入った事情があるわけですね。お腹も空いてるでしょうし、三人でご飯でも食べながらお話ししましょうか」

「え。ご飯……?」

猫神様からのまさかの提案に、私のお腹は卑しくも「ぐう」と鳴る。

「わーい、ご飯ー! ボク、猫神様の作ったご飯大好き!」

蜜柑くんは飛び上がって喜び、それを見た猫神様は穏やかに微笑んで、私たちを奥

の座敷へと案内する。足を進めるたび、何やら美味しそうな香りが漂ってくる。

「お腹が空いてると、気持ちも沈みますからね。ぎょうさん食べて、ゆっくりしててくださいね」



炊き立ての筍ご飯に、千枚漬けと赤だし。艶々のだし巻き卵と、メインは桜鯛の煮付け。

座敷に通された私たちに猫神様が用意してくれたのは、旬の食材を使った手料理だった。

「わあ……。ほ、ほんかくてき」

まさかここまでしっかりとしたご飯をいただけとは思っていなかったで、私は驚きと感動とで目を回してしまふ。

やけに美味しそうな匂いがするな、とは思っていたけれど、こうして実物を目の前にすると、手慣れた感じのする盛り付けまでもが美しい。

隣に座る蜜柑くんはすでに食べ始めており、お箸をぎこちなく使いながら「うん、美味しい!」としきりに唸っている。

「あ、あの。私までご馳走^{ちそう}になっちゃっていいんですか？ それにお代は……」
「お代なんていりません。あなたは蜜柑さんのことをここまで案内してくらはった恩人ですから」

「いえ、そんな。私、行き先に迷ってばかりで全然役に立たなくて」

道案内を申し出たわりに、ここへ来るまでにあちこち彷徨^{さまよ}ってしまった。ほとんど蜜柑さんと一緒に迷っていただけなので、とても仕事をしたとは言えないのだけれど、「そんなことないよ！ 桜おねえちゃんが一緒にいなかったらボク、ここまでたどり着けなかったもん」

蜜柑くんはそう、口元にご飯粒を付けたまま私をフォローしてくれる。

「み、蜜柑くん……」

彼の優しすぎる言葉にじーンとして、私は思わず泣きそうになる。

「そういうことですから、ほんまに遠慮せんと。それに、私も自分の作った料理でお腹いっぱいになってもらえるのは嬉しいんで」

優しい二人に促されて、私はようやくお箸を手取る。そうして最初に口へ運んだのは、メインの桜鯛の煮付けだった。

甘めの煮汁が染み込んだ身が、口の中で解けていく。

「お、美味しい……」

あったかくて、顔全体がとろける。

「お口に合って何よりです」

ふふ、と微笑する猫神様の美しい姿に、視界まで幸せになる。見た目も綺麗で、優しく、色んな意味で神様って感じがする。

「それで、蜜柑さん。こっちの世界で会いたい人がいるって言うてましたよね？」

猫神様は私たちの向かいに座ると、ようやく本題に入ったようだった。

（さっきも聞いたけど、こっちの世界って……？）

私が赤だしをすすりながらキョトンとしていると、それに気づいた猫神様が補足してくれる。

「こっちの世界いうのは、あなたたちのような人間が住む『この世』のことで、『現世^{うつよ}』といいます。そして私たちのような存在は、本来は『幽世^{かよ}』という別の世界に住んでるものなんです」

「うつしよと……かくりよ？」

急にファンタジーの世界に飛び込んでしまったような気がしたけれど、目の前にいる彼らがまさにそういう存在なのだから今さらか、とも思う。

「私たちが今いるこの場所は、その狭間にある空間で、普通の人間にはたどり着けません。あなたのように、私たちの存在が見える特別な人でないと」

言われて、ハッと思い出す。

なんとなく流されるまま私はここにいるけれど、普通の人はそもそも彼らの存在すら認知することができないのだ。

「たまにいたはるんです。あなたのように、我々『あやかし』の姿が見える人間が」「あやかし……」

彼らのような存在には今まで何度も遭遇してきただけで、それがあやかしと呼ばれるものだというのは初めて知った。

普通の人には見えない、不思議な存在。それが見える私は、幼い頃から嘘つき呼ばわりされて、周りとうまく付き合うことができなかった。

「普段は幽世に住んでいるあやかしですが、修行を積んで一人前になると、こちらの世界にやってくる者もいます。それは問題ないんですが、稀にこの蜜柑さんのように、まだ半人前にもかかわらずこちらの世界へ迷い込む者もいます」

半人前、と言われた蜜柑くんは気まずそうに苦笑して頭を掻く。どうやら彼は道に迷っただけでなく、世界そのものに迷い込んでしまっていたようだ。

「蜜柑さんのような、こちらの世界で迷子になったあやかしを、あちらの世界へ送り帰す案内人——それが、私の役目なんです」

そう言うとき、彼は蜜柑くんの方を見て「ね？」と優しく微笑む。

蜜柑くんは口いっぱいにだし巻き卵を頬張ったまま、「うん！」と頷く。
 そうか。だから蜜柑くんは猫神様を捜していたのだ。
 けれど、まだ一つ疑問が残っている。

(蜜柑くんがこっちの世界で会いたい人って、どんな人なんだろう……?)



食事を済ませてお腹がいっぱいになると、蜜柑くんはうつらうつらと舟を漕ぎ始める。

「蜜柑さん、蜜柑さん。まだ眠ったらあきませんよ。こっちの世界でまだやりたいことがあるんでしょ？」

「ふあ……あ、うん。そうなんだ。ボク、ずっと前にこの世界でお世話になった人に会いたくて……」

寝ぼけ眼をこすりながら、蜜柑くんはここへ来た目的を思い出す。

「ずっと前に、この世界で？ あれ。蜜柑くんって、前にもここへ来たことがあるの？」

不思議に思っ、私は尋ねる。

まだ半人前のあやかしである蜜柑くんは、本来ならまだこっちの世界に来てはいけ
ないはずだ。なのに以前にもここへ来たことがあるということは、もしかして彼は迷
子の常習犯なのだろうか。

「んつとね。その人と会ったのは、ボクがまだあやかしになる前のことだよ」

「あやかしになる、前……?」

ますますわからなくて、私はオウム返しに聞く。そこへ助け舟を出してくれたのは
猫神様だった。

「あやかしは、もともと現世で生きていた人間や動物の生まれ変わりも多いんです。
特に強い未練を残して亡くなった場合は、あやかしとなって前世の記憶を取り戻すこ
ともあります。蜜柑さんの場合は、昔こちらの世界で生きていた猫が、亡くなった後
にこうしてあやかしになったんですよ。ですから今は、一人前の化け猫になれるよう
修行中なんです」

ね、と彼が蜜柑くんに微笑むと、蜜柑くんはやはり「うん!」と元気よく返事を
する。

生まれ変わりという神秘的な現象をさらりと説明されて、私は不思議な気持ちに
なった。

「生まれ変わり……。じゃあ蜜柑くんが会いたい人ってもしかして、前世の飼い主さ

んってこと?」

「かいぬし?」 名前はよく覚えてないけど、こっちの世界ですつと一緒にいた人だよ。
優しい女の人だった」

彼の話からすると、やはり会いたい人というのは彼の飼い主だった可能性が高い。
「本来であれば、今すぐにでも蜜柑さんをあちらの世界へ帰さなアカンのですけれ
ど……」

「えつ。やだよ、猫神様。ボク、どうしてもあの人に会いたいんだ。猫神様ならなん
とかしてくれと思うってこまで来たのに」

蜜柑くんは必死に訴える。確かにこの優しい神様なら、困っている人を見ると放っ
てはおけない気がする。

「一目見るだけでいいんだ。あの人はきつと、ボクの姿も見えないだろうし……。あ
の人が元気でいるところさえ確認できたら、すぐに帰るからさ」

「そうですね。少しだけ寄り道するくらいなら、上の方々も許してくらはることで
しょう。一緒に、その人のことを搜してみましょか」

「ほんと? やったあ! ありがとう猫神様!」

やっぱり、こうなった。どうやら蜜柑くんの見立ては間違っていないかったらしい。
それにしても、『上の方々』とは。神様より上の存在って、一体何者なんだろう?

「……しかし問題は、その人がどこにいたはるのか、ですよ。蜜柑さんがこの京都に迷い込んだいうことは、ここからそう遠い場所ではないと思いますけど」

そういうもののなのか……と、私は今日何度目かになる感想を抱きつつ、熱いほうじ茶をすすって二人の会話の行方を見守る。

「蜜柑さん。その人の居場所について、何か手掛かりになりそうな記憶はありませんか？ たとえばその人の家の近くに、何か目印になりそうなものがあつたりとか」「うーん、家の近く……。そういえば、あの人はよく、ボクと一緒に近所の神社に行つてたよ。そこでゆっくり散歩をして、ぼーっと木を眺めてることが多かった気がする」

家の近所に神社があつた。貴重な情報ではあるけれど、残念ながらそれだけでは場所が絞り込めない。何しろここ京都には歴史ある神社仏閣がそこかしこに存在しているのだから。

猫神様も、これには困った顔をして頭を悩ませている。

「もう少し、情報がほしいですね。その神社ならではの特徴とか、何か思い出せることはありませんか？」

「うーん、思い出せること……」

蜜柑くんはしばらく部屋の天井をぼんやりと眺めていたけれど、やがて何かに思い

当たったのか、ほんのりと口元を綻^{はなひろ}ばせて言った。

「そういえば、桜が綺麗だったよ」

「桜？」

急に私の名前が呼ばれたような気がして、一瞬どきりとする。

けれどももちろん、彼が口にしたのはお花の桜の方だった。

「桜の季節になるとね、その神社にはたくさんのお店が集まって、人もいっぱい来るんだ。みんなで美味しいものを食べながら、楽しそうに桜を見てたよ。ボクも、あの人も」

そう語る蜜柑くんの表情は、これ以上ないほど幸せそうだった。きっと大切な思い出なのだろう。

「桜の時期にお店……ってことは、屋台のことかな？ お祭りがあつたってこと？」
私が聞くと、蜜柑くんは「そう、かも？」と曖昧^{あいまい}に首を傾^{かし}げる。

「この辺りで桜祭りが行われる神社いうと、ある程度は絞られますね。平野^{ひらの}さんに長岡^{なが}の天神さん、やわたのはちまんさん、それから……」

猫神様が『さん』付けで並べたそれらの名前は、すべて京都にある神社のものだった。

京都の人は色んなものに『さん』を付けて呼ぶ文化がある。

名前が挙げられた神社は、平野神社、長岡天満宮、石清水八幡宮、平安神社、梅宮大社、向日神社の六ヶ所だ。

さすがは案内人の神様。現世の土地鑑もしつかりあるらしい。

「蜜柑くん。この六つの中に聞き覚えのある名前はない？」

「ごめん。ボク、あやかしになる前は人間の言葉はよくわからなかったから……」

「ああ、そっか」

確かにそうだな、と思う。彼がまだ普通の猫だった頃は、こんな風に人と話すことはできなかったのだから。

とはいえ、たまに人の言葉を理解していそうな反応をする猫もいるけれど。

「その神社の桜はね、お昼に見るのも好きだったんだけど、夜に見るのも綺麗だったんだ。境内のあちこちに灯りがあってね、夜でもたくさんの人が見に来てた」

「夜桜のライトアップもあったいうことですね」

猫神様の言葉を聞いて、私はすぐさまスマホで夜桜の情報を検索する。

ちょうど今は桜の時期。開花情報や祭りの日程など、桜に関する情報が日々更新されている。

「……石清水八幡宮と梅宮大社、それから向日神社では、夜桜のライトアップはないみたいです。他の三つの神社では開催されていますけど」

私がネットの検索結果を報告すると、猫神様は私と目を合わせて「ありがとうございます」と微笑んだ。

夜桜のライトアップがないことは、蜜柑くんの思い出の場所はそのところではないということだ。

となると、残るは平野神社、長岡天満宮、平安神宮の三つ。おそらくこの中のどれかが、彼の記憶にある場所なのだろう。

「蜜柑さん。その神社の桜は、どんな形をしてましたか？ 色んな形をしてませんでしたか？」

（形……？）

猫神様が不思議な質問をしたので、私はその意図を測りかねてみると、

「あつ。うん！ そうそう！ お花の形がね、みんなバラバラだった。花びらが少ないのもあれば、いっぱいなのもあって。どこを見ても、ちよつとずつ形が違うんだ」

蜜柑くんは興奮気味に、猫神様の質問に食いつく。

「なるほど。桜の種類が多いということは、その神社は平野さんかもしれませんね」

猫神様はそう納得した様子で、今度は私に声をかける。

「すみませんが、『平野神社』を検索してもらえますか。できたら境内の写真を蜜柑さんに見せてあげてほしいんですが」

私はもちろん快諾して、言われた通りに画像を検索する。すると、画面には平野神社と思しき境内の写真がいくつも並んだ。

「蜜柑くん。あなたの思い出の場所って、このことかな？」

スマホの画面を蜜柑くんに見せると、彼はそれを目にした瞬間、ふわふわの耳をびよりと立てる。

「……うん。間違いないよ。ボクがあの人と一緒にいたのは、この神社だ！」



蜜柑くんの思い出の場所は、平野神社で間違いない。

そこに行けばもしかしたら、彼の会いたい人と再会できるかもしれない。

「では、さっそく向かいましょうか」

猫神様は私と蜜柑くんを連れて表に出た。狭い路地を抜け、さらに先斗町を抜けて再び四条通に出る。

平野神社がある場所は、ここからだとは西の方角だ。さすがに歩いていける距離ではないので、必然的に交通機関を使うことになる。

「ええと……。ここから行くなら、バスと電車とどっちが早いんだろう……？」

近くには阪急電車の京都河原町駅、それから京阪電車けいはんの祇園四条駅とがある。その周りにはバス停もたくさんあるので、選択肢は多い。

けれど、まだこの土地に越きてきて間もない私には、平野神社までの行き方がわからない。猫神様ならきつと知っているだろうから、とりあえず彼についていこうと考えていると、

「駅前は人通りが多いので、ちょっと離れましょうか」

と、予想外の言葉が耳に届いた。

「えっ。駅の方に行かないんですか？ たぶんバス停も駅の近くにあると思いますけど」

「バスは使いません。もちろん電車も。私の背中に乗ってもらった方が速いんで」

「え？」

今、なんて言った？

私が目を丸くしていると、猫神様はやわらかい笑みを浮かべて言う。

「私は、自分の姿形を変えることができるんです。ほら、こんな風に」

言うなり、彼はボンッとささやかな白煙を上げて、一瞬にして姿を消した。

「えっ。猫神様!? どこに行っちゃったの?」

まるで手品のように消えてしまった彼を捜して、私はオロオロと辺りを見渡す。

「桜おねえちゃん。猫神様ならここにいますよ。ほら、ここ」と、蜜柑くんが隣から言った。彼は「ここ、ここ」としきりに私の足元を指差している。

「こゝ……？」

促されるまま自分の足元を見てみると、そこにはいつのまにか、一匹の白猫がいた。鼻と耳がピンク色で、白い体毛のところどころに赤い模様がある。

その特徴的な姿には見覚えがあった。

「あつ、この子！ さつき猫神様のところまで案内してくれた白猫ちゃん！」

そう私が叫んだ直後。

白猫はまたボンッと白煙を上げて、再び猫神様の姿へと戻った。

「どうです？ 便利でしょう？」

彼はそう言って、ちよつとだけ得意げに微笑んでみせる。

どうやらあの白猫は、蜜柑くんが最初に言っていた通り、猫神様で間違いなかったようだ。

「ちなみに今はあやかしの姿ですが、人間の姿にもなれるんですよ。この姿のときは、普通の人にも私の姿が見えるようになるんです」

彼はまたボンッと白煙を上げて、今度は人間の姿になった。

「わあ……」

そこに現れた彼の容姿に、私は思わず目を奪われていた。

顔の造形はそこまで変わらないけれど、もともと黄金色だった切れ長の瞳は、薄いブラウンの光を携えている。髪も短くなっており、今は烏の濡れ羽色からす。すらりとした長身に纏うのは、黒の着流しだ。

あやかしの姿では神々しい美しさがあつたけれど、こちらはこちらで、どこか怪しい色気がある。

「こ、こっちの姿も好きかも……」

なんて、浮ついた気持ちになっている自分に気づいて、私は慌てて頭を振る。

「と、あんまり遊んでると人目につきますね。もう少し人通りの少ないところへ行きましょうか」

猫神様は人間の姿のまま、私たちを連れて繁華街から離れていく。やがて人の気配のないところまで来ると、彼はようやく立ち止まった。

「さて。ではこの辺で。今からちよつと大きい体に化けますけど、びっくりせんといってくださいね」

そう前置きしてから、彼はまたしても白煙を上げ、今度はボンッ！ と大きな音を立てて変身した。

「ひゃっ……！」

思わず体が仰け反^ぞって、ヘンな声が出た。

そうして目の前に現れたのは、巨大な獣だった。

全長五メートルはゆうに超えていそうな、ネコ科に見えるもふもふ。白い体毛のところどころには赤い線のような柄があり、狼のようにシユツとした顔^{くまのつら}には隈取にも似た模様が浮かぶ。そしてお尻の辺りから伸びる尻尾は、二又に分かれてそれぞれ揺れていた。

「こ……これが、猫神様？」

あまりにも迫力のある姿に、私は口をばくばくとさせる。

まるで猛獣のようなその巨大なもふもふは、私と蜜柑くんを見下ろして言った。

「どうぞ、背中に乗ってください。私の体毛に隠れてしまえば、あなたの姿も周りから見えなくなります。そのまま平野神社までひとつ飛びです」

言われるがまま、私は恐る恐る彼の方へ近づく。猫神様は私たちが乗りやすいよう、伏せの姿勢をしてくれる。

白い体毛に覆われた背中中はふわふわで、手を差し入れてみるとどこまでも深い毛に埋もれていく。やがて指先がやわらかい皮膚に触れて、猫神様の体温を感じた。

なんて触り心地の良い背中なんだろう。このままずっともふもふしていたくなつて

しまう。

「ふふふつ。猫神様の背中に乗せてもらうの、久しぶりだなあー。ふわふわであつたかくて、すぐ眠くなっちゃうんだよね」

蜜柑くんはそう嬉しそうに言うのと、少しだけ助走をつけて猫神様の背中へと飛び乗った。すると彼の小さな体は、ふわふわの毛の中に埋もれて完全に見えなくなる。

「さあ、桜さんも」

猫神様が言った。

桜さん、と自然に名前を呼ばれて、私はなんだか胸の奥がくすぐつたくなる。

「そ、それじゃあお言葉に甘えて……」

蜜柑くんに倣って、私も少しだけ勢いをつけて彼の背中へ飛び込む。すると私の体もすっかり毛の中に埋もれて、視界が真っ白になった。あたたくて大きな背中中、干し立てのお布団みたいな良い匂いがする。

「それでは、出発しますね。よほどのことがない限り落ちることはない思いますけど、しっかり掴まっといってくださいね」

言い終えるが早いか、彼は腰を上げて動き出した。

揺れはそれほど感じなかったけれど、何か重力というか、まるでエレベーターで上昇したときのような、全身が下に引つ張られるような感覚があった。

（もしかして、飛んでる……？）

体を包む浮遊感。滑らかに前進するその感覚は、昔飛行機に乗ったときのことを思い起こさせた。

今自分がどうなっているのかを確認したくて、私は猫神様の背中に手をつき、ゆっくりと上半身を起こしてみる。そうしてふわふわの白い毛の中から顔を出してみると、「わ、あ……！」

視界いっぱいに広がった景色に、思わず声が漏れた。

私たちは、空を飛んでいた。

夜の帳が下りた濃紺のうこんの空に、小さな星たちが散らばっている。そしてその遥か下には、ひしめき合うようにして人工的な光が広がっていた。

京都の夜景。碁盤の目の形に並んだ街並みが、ずっと遠くに小さく見える。

「す、すごい……！」

「そろそろ着きます。一気に下へ降りますんで、気をつけてくださいね」

猫神様がそう言った直後。今度は全身が上に引つ張られるような感覚があった。

お腹が浮くような感覚。

そのまま視界は急激に下界へと近づいていく。碁盤のマス目が大きくなっていく。

着地の瞬間はちよつとだけ怖くて、私は再び猫神様の毛の中に顔を埋めた。すると、

すぐ隣にあった蜜柑くんの顔が、こちらと目を合わせてにこりと微笑む。

「大丈夫だよ、桜おねえちゃん。怖くないからね」

彼はそう言って、私の右手をきゅっと握ってくれる。

優しい蜜柑くんと、あたたかい猫神様の背中。二人のぬくもりで私の胸はいっぱいになって、こんな気持ちになるのは久しぶりで。なんだか少しだけ、泣いてしまいうになった。



平野神社の近く、ひと気のない場所を選んで猫神様は着地した。

物理の法則を完全に無視して、ふわりと音もなく降り立ったその様を見ると、やっぱり神様なんだなあと思ってしまう。

「さあ、着きましたよ」

猫神様はまた伏せの体勢になって、私たちが降りやすいようにしてくれる。そうして私と蜜柑くんが背中から降りると、ポンッと白煙を上げて元の白い青年の姿に戻った。

「あれ？ 猫神様、お耳が猫のままだよ？」

蜜柑くんが言って、私はすぐさま猫神様の顔を見上げた。すると、彼の頭の上には蜜柑くんと同じ形の、ふわふわの白い耳がびよこんと生えていた。

「おや、ほんまですね。うっかり仕舞い忘れてしまいました」

ふふふ、と微笑みながら、彼はまたボンツと白煙を上げる。そうして再び煙が晴れる頃には、彼の耳は元の形に戻っていた。

（猫神様の猫耳、……か、可愛かった）

一瞬だけ見えた、彼のふわふわの耳。あまりにも愛らしいそれが隠されてしまうのは、ちょっとだけ名残惜しかった。

時刻は午後七時半。辺りは暗く、人の姿も見えないけれど、平野神社がある方角からは確かな賑わいが聞こえてくる。

蜜柑くんはキョロキョロと辺りを見渡して、オレンジ色の耳をピンと立てた。

「ボク、この場所を知ってる……。あの人いつも通ってた道だ」

そう呟くなり、彼は居ても立ってもいられなくなったのか、道の先へと駆け出した。一拍遅れて、私たちも慌ててその後を追う。

平野神社の周りをぐるりと半周ほどしてから、細い道へ入る。と、右手に見えてきた木造一軒家の前で蜜柑くんは足を止めた。

「……ここ、かも。ボクがあの人と一緒に住んでいた家」

彼が見上げたその家は、かなり年季の入った二階建てだった。敷地は板塀で囲まれていて、中はよく見えないけれど、人が住んでいそうな気配はある。ただ、今は家の灯りが点いておらず、留守の可能性が高かった。

「どこかに出かけたはるのかもしれないね。ここで待ち続けるのもなんですし、一度平野神社の方も見てみますか？」

猫神様が提案して、蜜柑くんは頷く。

蜜柑くんがまだ普通の猫だった頃、その人はよく平野神社を訪れていたという。ならば桜の咲く今の季節は、夜桜を見に行っていることも考えられる。

私たちは三人横一列に並んで、平野神社へ続く道を歩いていく。一番左側に立つ私は、真ん中を歩く蜜柑くんのふわふわの耳を見下ろして言った。

「会えるといいね、その人に」

「うん……」

と、小さく返事をした蜜柑くんの顔が曇っているように見えて、私は首を傾げた。

「どうしたの？ 何か心配なことでもあるの？」

「……会えるかどうか、自信がないんだ」

ぱつりと呟くように言った彼の言葉の意味を、私は正しく理解できなかった。いっになく元氣のない顔をする彼の代わりに説明してくれたのは、猫神様だった。

「我々あやかしは、人間と比べると長い年月を生きます。蜜柑さんがあやかしとして生まれて、物心がついて、前世の記憶を思い出すまでも時間はいくらもかかりませんでした。おそらく、前世の蜜柑さんがその人と一緒にいたのは二十年以上前のことになります。二十年もあれば、人間は年老いていきますから」

「あ……」

二十年。その年月は、人間にとっては多くの変化をもたらすのに十分な時間だった。二十年もあれば、赤ん坊だった子は成人しているし、若者は中年になる。そして老齢の人間ならば、寿命を迎えてもおかしくはない。

「あの人は……きつと、そんなに若い人じゃなかった。だから早く会いに行かないと、もう二度と会えなくなるかもしれないって思ったんだ」

蜜柑くんははつきりとは言わないけれど、最悪の場合、その人はもう生きてはいないかもしれない。

だから、できるだけ早く会いに行くために、彼はまだ半人前なのにもかかわらず、この現世へと迷い込んだのだ。

「……そっか」

それまで一人楽観的に構えていた私は、事の深刻さを理解する。

せっかく蜜柑くんがここまで来たのに、このまま会えないなんて可哀想だ。どうか

会えますようにと、二人の再会を心から願ってやまなかった。



平野神社の境内では、ちょうど夜桜のライトアップが行われていた。

入り口の大鳥居を潜り、楼門まで続く参道を歩くと、両脇には朱塗りの灯籠が等間隔で並んでいる。その周りでは、多くの種類の桜が見頃を迎えていた。薄桃色の花びらがついたものもあれば、白い花びらに葉っぱがついたもの、薄紅色の花をつけた枝垂桜まで。

「綺麗……。本当に、たくさん種類の桜があるんだね」

夜の境内で、淡い光に照らされたそれらを眺めながら、私は恍惚の溜息を吐く。

（でも、お店はない……のかな？）

夜桜を求めて、境内にはたくさんの方が集まっている。けれど蜜柑くんの言うていたような屋台はどこにもない。

「ここ数年は、桜の木の保護のために、屋台やお茶屋さんの出店は廃止されたようなんです。観覧できる場所も、一部有料のエリアができたようで」

と、まるで私の思考を読み取ったかのように教えてくれたのは猫神様だった。

「桜の保護？ そうだったんですか」

時代は移り変わっていく。蜜柑くんの記憶とは異なる現在の様子は、確かな時間の流れを感じさせた。

「あ！」

と、先頭を歩いていた蜜柑くんが不意に声を上げた。足を止め、顔だけを右に向けて固まっている。

釣られて私たちも同じ方向を見てみると、視線の先には一人の女性の姿があった。淡い光の中に浮かび上がる、見事な枝垂桜。それを静かにじつと見つめている老年の女性。トレンチコートを纏った体は細く、短く切り揃えられた髪はグレイヘアだった。

もしかして、と。私は猫神様の顔を見上げる。猫神様も、私と目を合わせてこくりと頷く。

女性を見つめたままの蜜柑くんの隣へ、私はそっと歩み寄った。すると蜜柑くんは、
「……あのんだ」

と、小さく息を吐くようにして言った。

「あの女の人が、蜜柑くんの捜してた人？」

「うん。年はとってるけど、たぶん」

おそらくは七十代くらいのも、上品な佇まいの女性だった。一人で来ているのか、同伴者らしき人物は見当たらない。

「あの人はいつもあんな風に、この神社でばーっと桜の木を眺めてたんだ。それで家に帰ったら、この風景を思い出して、よく絵を描いてた」

蜜柑くんの記憶によると、彼女は絵画教室の先生か何かをやっていたという。家の中には描きかけのキャンバスがたくさんあって、桜の絵もよく描いていたらしい。

子どもはおらず、夫も早くに亡くした彼女は、あの家で蜜柑くんと一緒に暮らしていた。だから蜜柑くんがいなくなった後、彼女はひとりぼっちで寂しい思いをしているんじゃないかと、蜜柑くんはそれだけが気がかりだったようだ。

「ボク、最後にお別れの挨拶ができなかったんだ。どうしてだか、よく覚えてないんだけど……最後の日は、家の窓が開いていて、ボクは勝手に外に出ちゃって。そしたらいつのまにか、ボクはあやかしになってた。こっちの世界で死んじゃったから、ボクは生まれ変わって幽世に行ったんだって、他のあやかしに教えてもらった」

家の窓から外に出て、その先で、おそらく何かがあったのだ。もしかしたら事故にでも遭ったのかもしれない。そうして命を落とした蜜柑くんは、最後にあの人とお別れをすることができなかった。

「ボクが急にいなくなっちゃったから、寂しい思いをさせちゃっただろうなって。あ

の人が泣いてるんじゃないかって、ずっと心配だったんだ。……でも、思ったよりも元気そうでよかったよ。相変わらず、ここで桜を見てたんだね」

そう言った彼の横顔は、慈愛のぬくもりに満ちていた。大切なものを見守る目。安堵^どの笑みを浮かべた口元。

けれど、彼はもう二度と彼女と触れ合うことはできない。せつかくこうして会に來たのに、こちらの存在に気づいてもらうことさえできない。

その事実が齒がゆくて、私は胸の奥がギュッと締め付けられる。

なんとかして、蜜柑くんがここまで会に來てくれたことを彼女に伝えたい。だから、

「あの。すみません」

どうしても我慢できずに、私はその人に話しかけてしまった。

見知らぬ女子高生から急に声をかけられた彼女は、不思議そうにこちらを振り返る。

「あなたは……？」

そう問いかけられて、私はやっと我に返った。

（しまった）

何の考えもなしに、衝動的に体が動いてしまった。これから彼女にどう説明をするのかも、何の準備もしていない。

けれど時すでに遅し。相手の意識はもうこちらに向いてしまっている。もはや腹を括^くるしかなく、私はしどろもどろになりながらも、なんとか言葉^{ことば}を紡ぐ。

「えっと、その……いきなり話しかけてしまつてすみません。もし、ご気分を悪くされたら申し訳ないのですが」

そう前置きしてから、私は改めて彼女の目を見て、恐る恐る尋ねた。

「あなたは昔、猫ちゃんを飼っていませんか？ 二十年くらい前に」

「猫？」

その質問を耳にした瞬間、彼女の瞳が確かな動揺を示す。

「……なんで、そのことを知ったはるんですか？」

当然の疑問だった。お互いに面識すらない人間が、急に過去のことを言い当てたのだ。不審に思われるか、気味悪がられるに違いない。

今までもそうやって、私は人から避けられてきた。

彼らが私に向けてくる、異様なモノを見る視線。あれを思い出すだけで、たまらず体が震えそうになる。

けれど私は、それでも今は、真実を伝えたかった。

「実は私、人には見えないものが見えるんです。あなたの目には映っていないかもしれないけれど……あなたのそばには今、猫ちゃんがいるんです。ずっと遠いところか

ら、あなたに会いにやってきたんです」

たどたどしくも、そう私が伝えきった直後。彼女は痩せた両手で自らの口元を覆って、

「……ミカンのことですか？」

信じられないといった表情で、私の顔をじっと見つめた。

「あの子が今、私のそばにいらっしゃるんですか？」

どうやらわかってくれたらしい。『ミカン』という名前は、この現世で彼女と一緒に暮らしていた頃からのものだったのだ。

当時の蜜柑くんは、人間の言葉をよく理解できなかったと言っていた。けれど、彼女が何度と呼んでくれたこの名前の響きだけは、しっかりと覚えていたのだ。

「ミカンは……私のせいで死んでしまったんです。あの日は私の不注意で、窓を開けばなしにしてたから……そこから外に出て、車に轢かれても。私のせいで、可哀想なことをしてしまいました」

当時のことを思い出しているのか、彼女は口元を覆ったまま、眉間に深いシワを刻む。

やはり蜜柑くんはその日、事故に遭ったのだ。もう二十年も前のことを、女性はい今しがた起こったことのように、悲痛な面持ちで振り返る。

「私には、あの子の世話をする資格なんてなかったんです。ほんまに、可哀想なことをしてしても……。あれからもう、命あるものを引き取ることはせんようになりましてけど、それが償いになるはずありませんから……」

蜜柑くんはもとと捨てられていた仔猫で、冬の寒い夜に段ボールの中で震えていたという。それを不憫に思った彼女が拾って、一緒に暮らし始めたのだ。

「私なんか拾わなければ……もっと別の人に拾われてれば、あの子は幸せになれたかもしれません。だから……私はあの子に恨まれても仕方がないんです」

恨まれていて、と彼女は言う。蜜柑くんがここへ来たのはそんな理由じゃないのに、彼女は勘違いをしている。

「違う。違うよ」

いつのまにか、蜜柑くんがすぐ隣までやってきていた。

彼は女性の目の前に立って、うんと背伸びをして、今にも泣きそうな彼女の頭を撫でている。けれどそのぬくもりは、お互いに感じ取ることはできない。

「ボクは幸せだったよ。だから、そんな風に言わないで」

よしよし、と子どもをあやすように蜜柑くんが言う。

この人と一緒に暮らせて幸せだった。そう蜜柑くんは言っている。

だから私は、目の前で懺悔の言葉を口にするこの人の手を取って、両手でぎゅっと

包み込んで言った。

「ミカンくんは、あなたと一緒にいられて幸せだったと言っています。彼があなたに会いに来たのは、あなたが寂しい思いをしているんじゃないかと心配だったからです。だから、どうかそんな風に言わないで。ミカンくんの気持ちをわかってあげてください」

こんな見ず知らずの女子高生の言葉を、どこまで信じてもらえるかはわからない。

それでも、どうか伝わってほしい。

「あの子が、そんなことを……?」

彼女は瞳を揺らしながら、今度は手元のカバンから一枚のポストカードを取り出した。

そこには繊細なタッチで描かれた水彩画——一匹の猫のイラストが印刷されていた。

ふわふわのオレンジ色の毛を持った、茶トラの男の子。やんちゃそうな鮎色の瞳は、今の蜜柑くんとそっくりだ。

「昔、私が描いたあの子の絵です。いつも元氣いっぱい、いたずらすることも多かったけど、私が風邪をひいたらじっとそばに寄り添ってくれる、優しい子でした」まるで笑っているようなその猫の顔に指を添えて、彼女は消え入りそうな声で呟く。

「そうやね……。あの子は、人を恨んだりするような子やない。心優しくて、可愛くて。ほんまに、大事な宝物でした」

そう言い終えたとき、彼女の瞳から、ぼろぼろと涙が溢れ始めた。

それをすぐ隣で見ていた蜜柑くんもまた、鮎色の瞳から、一粒の雫をこぼした。



「ありがとう、猫神様。それから桜おねえちゃんも。ボク、こっちの世界に来てよかったよ」

女性と別れた後。私たちはまた、ひと気のない場所に戻っていた。

さっきの平野神社では私が勝手な行動をしてしまったので、猫神様に怒られるんじゃないかと思っただけ。彼は変わらず穏やかな笑みを浮かべて、「ありがとうございませう」と、蜜柑くんと一緒にお礼を言ってくれた。

「桜さんのおかげで、蜜柑さんの心残りもなくなったんですね。これで私も心置きなく、蜜柑さんを幽世へと送り帰せます」

こちらの世界へ迷い込んだあやかしを、あちらの世界に送り帰す。それが猫神様の役目だと言っていた。

半人前のあやかしである蜜柑くんは、本来ならまだこちらの世界へやってくることはできない。そしていずれ一人前になって再びこちらへ来る頃には、私ももう生きているかどうかはわからない。

だからきつと、私と蜜柑くんが顔を合わせられるのは、これが最後になるだろう。「蜜柑くん。今日は、あなたに会えてよかったよ。あつちの世界に帰っても、元気でね」

「うん！ 桜おねえちゃんも元気でね！」

蜜柑くんはそう明るい声で言うと、猫神様の前に立って彼の顔を見上げた。

猫神様はその場にひざまずいて、蜜柑くんの右手を取る。そして、その小さな手の甲に、そっと口づけを落とす。

するとたちまち蜜柑くんの体は真つ白な光に包まれて、春の夜の星空へと、ゆつくりと溶けて消えていった。



再び獣の姿になった猫神様は、その背中に私を乗せて家の前まで送ってくれた。

「桜さん。今日はほんまにありがとうございました」

別れの挨拶の際にまた白い青年の姿になった彼は、穏やかな笑顔で恭しく頭を下げる。

「い、いえ！ 私は別に何もしてないので……」

「そんなことないですよ。蜜柑さんが晴れやかな気持ちであちらの世界へ帰れたんは、あなたのおかげですから」

そんな風に優しく褒められると、私はなんだか顔が熱くなってしまう。あやかしが見えることで、こうして誰かの役に立てる日が来るなんて、今まで想像したことなかった。

「ところで、こんな時間まで連れ回してしまつて大丈夫でしたか？ お家の方が心配したはるのでは……」

「あつ、それは大丈夫です。私、ずっと前に両親を亡くして……。今一緒に住んでいる人は、いつも仕事で遅くなりますから」

幼い頃に事故で父を亡くし、小学二年生の頃に病気で母を失った私は、今まで親戚の家を転々とする形でたくさんの人たちにお世話になってきた。

彼らと違ってあやかしが見える私は、あらゆる場面で気味悪がられてきたけれど、先月からお世話になっている茜さんはそういうことを気にしないタイプの人なので、私は色んな意味で助かっている。